

---

# FRIENDS ~ フタリノカタチ ~

天千代

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FRIENDS〜フタリノカタチ〜

### 【Nコード】

N5565D

### 【作者名】

天千代

### 【あらすじ】

1990年発売のB・Zミニアルバム『FRIENDS』の世界感を作者の天千代なりに感じたまま表現したファンフィクションです。テーマは『男女間の友情』について。『僕』が『彼女』へ想う気持ちの葛藤を経てたどりつく先は…。二人の物語は少し昔へ遡るところから始まります。

**PROLOGUE FRIENDS (前書き)**

この小説はファンフィクションです。

## PROLOGUE FRIENDS

一生のうちに巡り逢える人の数なんて、知れたもの。

巡り逢うべくして出逢ったひとがいるし、

巡り逢わなければよかったのに出逢った人もいたり。

縁というのは実に奇妙なもの。

でも、それは偶然じゃない。

もしも運命の神様がいたら、

悪戯や暇つぶしに遊んでるんじゃないか？って思うような、

そんな出逢いもあったり。

でも、ほとんどの人達は、バブル期絶頂の中の恋愛ドラマみたいな、  
そんな劇的な、運命の悪戯のような出逢いも無く。

なんとなく、誰かと出逢い、

なんとなく、誰かと恋に落ちて、

なんとなく、誰かを傷つけたりして、

なんとなく、誰かと別れてみたり。

そんな、『なんとなく』な恋愛を繰り返して。

いつの間にか、誰かと出逢い、

いつの間にか、誰かと恋に落ちて、

いつの間にか、幸せを見つけて、

いつの間にか、今に至る。

そんな、『いつの間にか』な恋愛を経験している。

オトコとオンナ。

難しいのは、その関係。

トモダチでいたい。

コイビトでいたい。

ずっと一緒にいたい気持ちは、どっちも変わらない。

友達でいたい。

恋人でいたい。

ずっとお互いに支えたいと思う気持ちは、どっちも変わらない。

ともだちでいたい。

こいびとでいたい。

ずっとずっとお互いに『すき』でいたい。

でも、今の二人の気持ちはちょっとだけ昔と違う。

友達と恋人。関係が違っただけで、いろんなものが違ってしまっ

これはそんな二人の『友達』のお話。

…いつまでも手を繋いで、いられるような気がしていた。

## Scene 1 いつかのメリークリスマス

三年前、冬。

ゆつくりと十二月の明かりが灯り始め、慌ただしく踊る街を誰もが好きになる。

そんな街中を眺めながら、仕事を定時で切り上げていた僕は渋滞に捕まったタクシーの中にいた。

「お客さん、すみませんねえ。この時間いつもこの道渋滞なんですよね。」

すまなそうにタクシーの運転手が、フロントミラー越しに僕を見た。僕と同じくらいの歳だろうか？

若い感じの運転手だった。

時計を見ながら僕は運転手になんとかならないかとお願いしてみた。運転手は少し顔をしかめながら言葉を返して来た。

「だから、ちょっと前の交差点右折しますか？って聞いたじゃないですか。だいたい…。」

話、というか愚痴が長くなりそうな運転手。

店はもうすぐというところでの渋滞だった。

時間がなかった。とりあえずもったいないけど、店に間に合いそうになくなるのは避けたかった。

しょうがないと自分に言い聞かせてここで降りることにした。

「まいど。」

釣りはいらないと告げるとニコニコする運転手を尻目に、僕は肌寒い舗道で一息ついた。

そのまま店へ向かい走り始めた。

5分は走っただろうか？だんだん吐き出す息の量が多くなっていく。確かこの角を曲がったところにあっただはず。彼女とこの間通った道だから間違いない。

記憶を辿って店の前に着いた時にはもう全身がクタクタだった。

さすがにくたびれて店の前で息をついていた。

その時、店主らしき小父さんがシャッターを閉めるために外に出てきた。

小父さんと目が合う。

「えっと、お客さんかな……？今日はもう店閉めるんだけど、欲しいのでもあるのかい？」

少し困っていた小父さんに無理を承知でお願いした。

店頭に飾ってあるアンティークな椅子が欲しい、と。

小父さんは少しうーんと考えていたが、にっこり笑って口を開いた。

「わかったよ。でも、現品限りだけどいいかな？」

大丈夫です、と言おうとしたが息があがっていたせいで、自分でも何を言っているのか解らない言葉を発していたみたいだ。

「ははは。まず、ちょっと落ち着いたらどうだい？まってなさい、今水もってきてあげるから。」

息が切れて一杯一杯な僕。

小父さんが笑いながら店の奥へ消えていった。  
でも良かった、何とか間に合った、と僕は一安心していた。

「ほら、お水どうぞ。」

小父さんが水を持ってきてくれた。

僕はお礼をして、自分を落ち着かせていた。

一息ついて僕は忙しいのにすみません、と切りだした。

ニコニコしながら小父さんはエプロンの紐を締め直して僕に答えた。

「大丈夫だよ。えっと、ショーウィンドーに飾ってる椅子だったよね？」

首を縦にふると小父さんも頷いた。

小父さんと会話が続いたが、適当に相槌をうつっていた。

「そうか。いいねえ、僕にもそんな時期があったなあ。今じゃすっかり昔だけだね。」

少し照れながら彼女にプレゼントをあげることを話す僕に、

小父さんが冷やかしをいれながら慣れた手つきで椅子を持って帰れるようにしてくれた。

椅子の代金を支払うと、小父さんが見送りのために外まで見送りについてきてくれた。

「ちょっと重いよ？大丈夫？」

小父さんが心配そうに僕を見る。



電車で帰るから大丈夫、と話すと小父さんは微笑んでくれた。

「そうかい、気をつけてね。じゃあ、素敵なクリスマスを。」

メリークリスマス、と挨拶を交わして僕は駅へ向かった。

ちよつと重い荷物だが、それほど苦にはならなかった。

電車の椅子に座り揺れながら荷物抱えている僕。

いろんなことを考えていた。

幸せなんだな、  
つて。

目的の駅に着くと彼女に今帰るね、と電話で連絡。

鼻歌でクリスマスソングを歌いながら、

線路沿いに続く道を家へ到着。

まあ、家といっても彼女の家へ、なのだが。

彼女のアパートへ到着すると、家のドアをあけて荷物を降ろし、  
た  
だいまと部屋に入る。

「おかえり。ご機嫌じゃない？ いいことあったのー？」

キッチンの方から彼女の声が聞こえた。

もう夕食の時間だった。

僕は早速買ってきた椅子を用意する。

彼女にリビングにこれないか？と呼びかけた。

僕の問い掛けに彼女が答える。

「ん？ まって。今、火止めるから。」

彼女はエプロンを外しながらリビングへ入ってきた。

「なーに？どうしたの？」

僕は誇らしげにプレゼントの椅子を彼女に見せた。

彼女は椅子を無言で見つめる。

不安になる僕。

だが、彼女は僕に笑顔を見せてくれた。

「欲しかった椅子じゃない。高かったでしょ、これ？」

彼女に心配されたが、プレゼントは気持ちが一番大事だろ？って僕は笑いながら言葉を返す。

「…そだね、ありがと。」

彼女は笑顔のまま、そっと目を閉じた。

僕も目を閉じ、彼女を抱き寄せて唇を重ねあう。

静かな部屋に響くのは、ボリウムを下げたTVの音だけ。

ちよつとの時間だけだったが、静かに目を開けて二人は微笑む。

「晩御飯、食べよっか。」

彼女自慢の手料理を堪能し、いつものようにどうでもいいような話で盛り上がる。

ずっとこんな日が続いたらいいな。なんて、少ししみじみしてしまった。

しばらくすると、彼女がケーキとワイン、グラス一式を持ってきた。

「クリスマスケーキ、食べる？ワインも一緒よ。」

僕は笑顔でうなづく。

「じゃあ、今二人分にわかるね。」

彼女がケーキを小皿に取り分けてくれた。

僕はワインの栓をあけてそれぞれのグラスに注いだ。

「じゃあ乾杯、だね。」

ちよつとまって、と僕は部屋の照明を落とし、用意した蠟燭に火を灯した。

綺麗なオレンジの光りが二人を優しく包む。

優しい光だった。

彼女がつぶやいた。

「綺麗……。いい感じだね。」

彼女が僕に微笑みかける。

そうだね、と僕も彼女に微笑みを返した。

「じゃあ、メリークリスマス。」

二人でメリークリスマスと言葉を交わし、ワイングラスを重ね合わせる。

小さく重なるグラスの音が、なんだか素敵に、それでいて切なく聞こえた。

「ねえ？」

彼女が僕の手を取った。

「踊ろっか？」

いいよ。と僕も彼女の手をとる。

二人が出逢った頃よく踊っていたダンス。

二人とも酔っていてステップはおぼつかなかった。  
しばらく踊ると、疲れた僕はソファーに腰掛ける。

部屋を染める蝋燭の火をずっと見ていた。

彼女を見つめながら、思わず僕は口に出した。

離れることはないよ、  
ずっと。

彼女はじっと僕の目を見て、笑顔でうなずいてくれた。  
二人にとって幸せな夜、でも僕は。

何故だか解らないけど、  
泣いてしまった。

いつまでも手を繋いでいられるような気がしていた。  
何かもが煌めいて、がむしゃらに夢を追い掛けた。

喜びも、悲しみも全部分かち合う日が来ること。

思って微笑みあっている、色褪せたいつかのメリークリスマス。

君がいなくなることを始めて怖いと思った。

人を愛するという事に気がついたいつかのメリークリスマス。

それから、数年後。

また、クリスマスが近くなり街が賑わいを見せている。

僕は信号街の交差点で白い息を眺めながら、幸せだった日々をなんとなく思い返していた。

彼女とは二年前に別れた。

今は『いいお友達』。

なんとも都合のいい言葉だ。

別れた直後はお互い忙しいけど、時々電話で会話はしていた。

お互いが嫌いになったわけじゃない。

ただ、お互いが恋人としてやっていくには少し出逢ったのが、恋人として付き合うのが早かったというのが二人で出した結論だった。

簡単に言えば、それぞれにやりたいことが見つかり、

追い掛けたい夢が強くなってしまった。

彼女はアパレル業界のバイヤーとしての自分の地位の確立のため。

僕は、ミュージシャンとして華やかな舞台に立つ夢。

そのためにはいろんな勉強が必要で、二人が恋人でいるにはいろいろと障害がおきてしまい、このままだとお互いが傷ついて駄目になると、

彼女が切り出したことだ。

それにも僕は納得した。

…というのは建前で、多分、お互いに自分のやりたいことに逃げ道を作りたくなかったんだと思う。

本気でやりたいことが見つかった、そういうことになるのだろうか？

僕は、今も彼女を好きだ。

だけどその『すき』な気持ちは、LIKEともLOVEとも言えない。

彼女もきつと同じくらいだと思う。

でも互いに好きでいるのは同じ。

別に恋人というカタチじゃなくてもいい、友達というカタチでもやっていけるんじゃないかって、彼女は前々から思っていたらしい。

お互い同意のもとで、別れようということになった。

今までありがとう、と最後に交わしたKISS。

なぜか今までで一番暖かいKISSに感じた。

彼女の温もりを感じながら僕は思った。

あの時のクリスマスに流した涙はきつと、こんな日がいつか来るのが怖かったからだ、と。

KISSのあと、僕も彼女も微笑んだ。

涙が出ることはなかった。

今までで一番つらい失恋だったはずなのに、不思議な気持ちになった恋の終わりだった。

信号が青になる頃、ふと我に帰って苦笑いした。

そんな立ち止まってる僕の側を誰かが足早に通り過ぎる。  
荷物を抱え、幸せそうな顔で。

そんな知らない誰かが幸せになるように願いながら、僕は寂しく家路を急いだ。

友達になってしまった『彼女』に、久しぶりに電話してみようと思っ  
て。

心なしか、懐かしい気分になった。

…わかってる。

完全に僕の罪なんだ。

罪が、始まって繰り返す。

## Scene 2 僕の罪

最近仕事が忙しかったのでうる覚えなのだが、『彼女』に電話するのは多分一年ぶりくらいだと思う。

だめだ、留守電。

とりあえずメッセージを残して、電話をきる。

何時ものようにひとり寂しくコンビニ弁当で晩御飯をすませ、疲れた体を休めた。

次の日、会社から帰ったあと、一息ついて『彼女』へ電話してみた。しばらくコール音が続く。

今日も留守電かと思ったその時だった。

「…もしもし？」

懐かしい声に思わず言葉を忘れてしまった。

「もしもし？」

僕は自分の名を告げて、久しぶりだねと挨拶した。

「あ、久しぶりい。元気？」

「私？ま、元気といえば元気かなあ。」

「そっか…。でさあ…。」

「はは。相変わらずじゃん…。」

積もる話がたくさんあった。



ひととおりそれぞれの生活状況のことや愚痴など、いろんな話で盛り上がった。

気がつけば一時間はたっていた。

『彼女』が疲れているのもなんなので、とまた翌日電話することを取り付けて、電話を切った。

なんだか懐かしい気持ちになった。

翌日もそのまた翌日も、僕は『彼女』に電話し『彼女』も僕に電話してくれる毎日がしばらく続いた。

まるで、やめた煙草に手を出すように。

当たり前のように『彼女』と電話するようになって、ふと思うことがある。

僕はただ、居心地のいい場所だけを探してあるく奴なんじゃないか？って。

いろんなことを考えた。

思ったように進んでない自分の夢のこと。

日々仕事だけに追われる毎日のこと。

知らないうちに衰弱していく、僕の気持ちや感情。

本当に今のままでいいんだろうか？という迷い、葛藤。

そんな心の隙を縫いながら、思わず言葉が溢れる。

…逢いたい。

「え…？」

『彼女』は突然の言葉に戸惑う感じだった。

僕はただ、素直な気持ちをもう一度言葉にした。

逢いたいんだ。君に、と。

静寂が長く感じた。

そんな静寂を切り裂いた『彼女』の言葉。

「…私も。」

えっ？と彼女の言葉に思わず、僕は聞き返してしまった。

「私も、逢いたいな。」

『彼女』は続ける。

「久しぶりに顔も見たいし、ね。」

電話口で表情はわからないが、『彼女』が受話器の向こうで微笑んでいるような気がした。

僕は今度の休日に逢う約束をして、電話を切った。

閉塞感しかなかった生活に、ちょっとだけ新しい風が吹いたような、そんな気がした。

そして約束の休日。

待ち合わせの公園のベンチで『彼女』を待つ僕がいる。  
今日の公園はやけに静かだな、なんてぼーっとしていた。  
すると、急に後ろから誰かが僕の視界を手で遮った。  
その手は僕の知っているちよつと冷たく、細くしなやかな指先の手  
だった。

「おまたせ。」

ごめんと謝りながら、僕の隣に座る『彼女』。  
恋人と呼ばれていたころの関係とは違うカタチで今、僕の隣にいる。

久しぶりに逢った『彼女』は髪型を変えていた。  
でも、時々見せる笑顔は変わってない。

やりたいことをやるためだとそれぞれの道を選んで、  
別れたことも、もうすっかり忘れてしまいそうな時が続くよ。

I KNOW I KNOW わかってる。

まだまだ、時は十分に過ぎてない。

僕だけのフライングだね。

DON'T YOU KNOW? 知ってるはず。

完全に僕の罪なんだ。

罪が、始まって繰り返す。

罪？

僕の罪？

わかってる。

『彼女』を幸せにできなかったこと。

『夢』を言い訳にして、逃げ出してしまったこと。

多分それが僕の罪。

そして僕は、それを繰り返そうとしてる。

でも今、僕の中にある気持ちは同じ罪を繰り返そうとしてる自分を  
なんとも思っていない。

ヒトとして、

オスとしての、本能。

ヒトを、

メスを愛したい、という本能。

そんな本能が僕の中にある。

だから例えそれが罪と呼ばれても、僕はきつとそれを繰り返す。

しっかり君を捕まえる、と。

誰かが僕に囁くけど。

何かが違うと感ずるのは、僕がただ臆病なだけなのか？

いや、でも『彼女』の気持ちはまだ、わからない。  
どんなに僕が『彼女』を好きでいても、僕はただの友達なのかもしれない。

お互いの気持ちはわからないまま。  
でもお互いの笑顔に触れたくて。  
そんな二人が今ここにいるのは、きっと…。

∴ Love、is？

Scene 2 - 2 Love is...

時間が過ぎるのを忘れてしまう程、話に夢中になる二人。

端から見れば二人はどう見えるのだろうか？

久しぶりに逢った彼女はやっぱり笑顔が多くて。

その笑顔に触れるたび、幸せな気持ちになる気がして。

そんな自分をちょっと後悔したりして。

しばらく公園で話込んでいたが、天気もいいし散歩でもしようと切り出し街中へ。

喫茶店でお茶しながら、またいろんなことを思い返していた。なん  
である時、嘘をついたのだろうか？

とか。

夢の中でまた君とつきあえた、

とか。

何度電話しただろう？

だとか。

でも、思った。

君と知り合いになってから、かなりの時間が過ぎた。

なにもかもが新しく浮かれたようにはしゃぎ続け、禁断の果実を貪る、そんな暮らし。

長くはもたないね、と。

まあ、現実が起こってしまったからなんとも言えないのだが。

いろいろと話をするうちに、考えてしまうことがあった。

僕の中の正直な気持ち。

『彼女』の中の本当の気持ち。

今こうして話している間にも時は過ぎる。

不思議な気持ちだった。

『彼女』といると時を忘れてしまう程、気持ちが高ぶる自分。

もう、二人とも気付いていたのかもしれない。

でも、今お互いの関係はきっと、その感情をもつことを拒んでしまっただろう。

そう思うとなんか、哀しくなった。相変わらず君は笑顔で次から次へと話題を変える。

僕も笑顔で相槌をうつていた。

恋というカタチのために、壊れるものがあること。  
知っているのに逢いたくなるのは、

恋だから？

愛だから？

それとも…？

…僕らが追ってる夢は本当は、同じものかも知れない。



### Scene 3 恋じゃなくなる日

話が尽きることはなくて、どれくらい時間がたったかもわからずにいた。

僕は自分の迷いや葛藤を抑えながら、『彼女』とこうして過ごす時間を大切にしようと必死だった。

ちよつと遅めの昼食をすませて、外へ出た。

「ねえ？次、どこいこつか？」

ちよつと歩こうか、と切り出すと、『彼女』も小さく頷いて僕の隣を歩く。

懐かしいけど、どこか昔と違う。

そう、ここにいるのは『友達』の二人。  
手元が寂しいのかもしれない。

「ねえ、海いかない？近いし。」

僕は今の時期は寒いよと忠告したが、『彼女』はいいからいいからと手を挙げてタクシーを止めた。

二人付き合い始めた頃よく遊びにいった海へ向かった。

冬の海辺をあてもなく歩いて、二人で貝殻集めて。

人もまばらな橋の上のベンチで、いつまでも波音聞いている。

二人きりの静寂。

言いたいことが体の奥で渦巻いている僕。

でも、言葉に出来ないそのことに今は苛立つこともなかった。

波音に耳を傾けてそれぞれ思いふける二人。  
『彼女』の俯く仕種に孤独の疲れが見えても、僕は何も出来なかった。

引きずることでも、突き放すことでもない。  
曇った気持ちを、ただ僕は押さえていた。

その日は、そこで別れた。

次の休日に彼女の家に遊びに行くことになった。

しばらくちゃんとした手料理を食べてないと笑った僕に、

「じゃあ、次の休み暇だし、作ってあげるよ。」

ということになった。

勘違いしないでね、と釘を刺されてしまったが。

僕の考え混む悪いクセが出る。

僕は、夢と現実のギャップに疲れて、『彼女』に逃げてるんじゃないかな？

まだ、好きなんじゃないかな？

本当の自分の気持ちに答えを出せないまま、『彼女』と休日に逢う日々がしばらく続いた。

昔によく似た日々が続いている。  
ワインを飲みながら踊って。

君の部屋のソファーにも座った。

でも、決して昔と同じじゃない…。

お互いに仕事は忙しいながらも、暇を見てはふたりで逢う日々はまだ、続いている。

でも元カレ、元カノの関係からは進展はない。

まあ、進展しようがないわけだが。

話をしているときの二人は笑顔が多い。

でも、並んで歩く時の二人の距離はどこか、昔とちがう。

ほんの少し、離れてあるく。

傷つかないように。

ほんの少し、口数を減らしてる。

大事なものの、無くさないように。

「ねえ、海いこう。静かなところがいいな…。」

その言葉の意味するところがわからなかったが、二人は海へ向かった。

肌寒い人気のまばらな海。

砂の上には二人の足跡。

それを波が消していく。

「ほら、貝殻。ちっちゃいね。」

はしゃぐ『彼女』。

それを見て笑う僕。

手招きされたので、少し苦笑いしながら冷たい水を掻き分けて、僕も貝殻を集める。

貝殻を手に持ちながら砂浜を並んで歩く二人。そんな時だった。

冷たい風が二人を近付ける。

くすぶる想い見透かすように。

強い戸惑いを意味のない笑顔にすりかえてまた、戸惑う。

「ほら、かわいいでしょ？」

石のカケラを使つて絵を描いた笑い顔の貝殻。  
僕に石のカケラを手渡す『彼女』。

「なんか描いたら？絵、うまかったじゃない。」

何を描けばいいか悩んだ。

いろんな想いがこみあげてくる。

僕はその想いを表すように、

少しずつ、ひとつずつ、絵を描いた。

小さな貝殻にひとつずつ絵を描いて、思い出を砂に埋めていく。  
遠くで響いてる鐘は何かの、終わりと始まりを告げている。

日も暮れかかる頃、夕日に映える海を見つめながら二人過ごす。  
時々、昔話みたいな思い出話にも花がさいたりして。

それにしても、付き合っていた頃よりも笑うことが多くなっている  
気がする。

そんなことを思っていたら、『彼女』が僕の心を見透かしたように  
笑った。

「なんか不思議だね。ずっと一緒だった頃よりも、あなたが近くに  
感じるの。」

『彼女』が遠くを見つめる。  
波音が心地いい。

この波が、僕の迷いを流してくれればいいのに。  
僕も、遠くを見つめていた。

「きれい……。いい感じだね。」

彼女がつぶやく。

オレンジ色の光。

まるで、あの頃のような光。

離れることはないよ。

脳裏を横切った、あの頃の僕の言葉。

まるで、あの日が戻ってきたみたいだった。  
でも、あの日には戻れない。

恋というカタチのために、壊れるものがあること。  
知っているのに逢いたくなるのは、

恋だから？

愛だから？

それとも…？

本能と迷いの間に揺れる僕。

でも答えは、見つかった。

自分が気付けないだけだった。

いや、気付いていたんだ。

僕らが追ってる夢は本当は同じものかもしれない。

腕時計の短針はすでに一をさそうとしていた。  
すっかり冷え込んだ、舗道を並んで歩く二人。

心なしか前より二人の距離は近付いている。

歩きながら吐き出す白い息が、白い街灯に照らされて改めて冬の寒さを実感した。

夜も遅いせいか、いつの間にか二人とも無口で歩く。

「ねえ？」

『彼女』が急に足を止めて、僕の目を見る。

「恋愛、してる？好きなひと、できた？」

戸惑った。

僕は、嘘をついた。

恋はいらない、とつぶやいて笑った。

自分でもわかるほどの独りよがり、だった。

「そっか。」

『彼女』は空を見上げた。

「私はね、好きなひと、いるよ。」

時が止まった気がした。

いろんなこと考えた。

でも、別にいいじゃないか、と割り切った。

だって今の僕らは、ただの『友達』なんだから。

あきれた。

僕は、自分にまで嘘をつくのか？

自分の想いを伝えなくていいのか？

冷たい空気を引き裂くように『彼女』は切り出した。

「ここでいいよ。送ってくれてありがと。」

家まで送る、と言ったが『彼女』は首を横に振って微笑んだ。

「これ以上、いっしょにいたら…。甘えちゃうから。」

静寂が、痛かった。

「今日は、楽しかったよ。あ、それとね。来週からはもう、ちょっと逢えないかもしれないね。仕事、また忙しそうになるし、でさ…。」

「

妙に早口になる『彼女』の言葉を遮るように、僕の言葉が舗道に響いた。



家まで、送ってくよ。

『彼女』は静かにうなずいた。

その顔はどこか、嬉しげで淋しげにも見えた。

そんな『彼女』は今日一番の笑顔と想いを、僕に見せてくれた。

真夜中、舗道で突然その腕を組んできた君は、  
とても、綺麗で。

そのまま僕はずっと、空を見上げてる。

恋じゃなくなった日、の空を…。

…季節が変われば、やがて想いも変わる。

## Scene 4 SEASONS

誰もが夢と現実の間で、悩む時期があるだろう。

僕は、結局現実を選んだ。

先の見えない暮らしよりも、しっかりと未来のビジョンが見える人生を。

馬鹿みたいにスポットライトの下の華やか世界にあこがれていた自分に、いつの間にか醒めていた。

努力もそれなりにした。

でも結局、才能という壁にぶつかった時何も出来ない自分がいた。

僕の積み上げてきたものが音をたてて崩れていくような、そんな感じで自信喪失してしまった。

でも、人生は一度しかない。

誰かもそう言って人生を決めたっけ。

だから、今できること、今やりたいことをやりたいようにやる。

そう決めた。

まあ、今日精一杯やるだけ。

そんな思いで、日々を過ごしている。

『彼女』との距離は相変わらず、微妙なままの関係だ。

友達以上、恋人未満。

この言葉が一番相応しいんじゃないかって思う。

でも僕の気持ちは、前ほど『彼女』には向いていなかった。

『彼女』は僕の大切な人。  
たくさんいる大切な人の一人だ。

今も好きな気持ちに偽りはない。

でもそれは恋と呼べるものじゃなくて、それとは違う感情。

こうというのが、男女の友情って呼んでいいのだろうか？

答えを出すのはやはり、難しい。

色んなカタチがあるんだよね、きっと。

まあいいや。

僕は、彼女が好きだ。

例えばどんなカタチであっても。

それでいい。

…戻ることのない流れの中で。  
心、燃やしたひと、だから。

## Scene 5 どうしても君を失いたくない

狂いなく季節は繰り返し、新しい冬がまたくる。

凍り付くような空気に包まれ、今日も目まぐるしく僕は暮らす。

明け方の濡れた道に車を止めてひとりで目を閉じ、  
少しだけ懐かしい夢を見た。

僕が走る夢を。

どうしても君を失いたくない。

胸の奥から、叫んでる。

戻ることのない流れの中で、心燃やした人だから。

窓に落ちる雪の粒ははかなく解けてなくなり、  
人気のない交差点を並んで歩く二人が見える。

恋じゃなくなることは、人を裏切ることになるのか？  
愛を貫くことの結果は、ひとつなのか？

どうしても君を失いたくない。

胸の奥から、叫んでる。

戻ることのない流れの中で、心燃やした人だから。

同じ涙を流しあえる、かけがえのない人よ。

どうか強く、手を取りあおう。

つらいときは、なけばいい。

「ねえ？なーに？ぼーっとしてるの？大丈夫？」

彼女の一言で、僕は我に返った。

そうだった、今は会社で知り合った新しい彼女とデート中だっけ…。

静かな海辺のベンチ。

元力ノとの思い出の場所に、彼女を連れて来てしまったらしい。

自分で自分を最悪なヤツだと、苦笑いした。

「あー。また面白いこと考えてたでしょ？」

さあ？と、とぼける僕。

彼女はかわいい笑顔をみせて、ふたりじゃれあう。

こんな日がいつまで続くんだろう？

いや、考えたって埒があかない。

前の恋愛で痛い程経験したじゃないか、と自分を戒める。

二人のことに蓋をして生きるとか。

激しく憎み合って、忘れるとか。

僕らの行く先がどこかに、あるはずだ。

と、自分に言い聞かせる。

恋愛なんか、なるようにしかない。  
人の感情だって生き物なんだから。

痛みがあっても構わない。

その痛みが、人を成長させるはずだから。

だからもう、僕は。

誰かを好きになっても迷わない。

自分らしく、生きて。

自分らしく、恋愛していく。

僕の、

『大切なトモダチ』が、教えてくれたから。

どうしても君を失いたくない。

胸の奥から、叫んでる。

戻ることのない流れの中で、心燃やした人だから。

いつか、一緒に海に行こう。

波の音を聞きたい。

あの日の砂の上で踊ろう。

過ぎ行く日々に、手を振って…。

追憶のカケラは、うつすらと白く世界を包んでいる。

君は目覚め、出掛けて行く。

変わらない街の、

人込みの中に。

## Epilogue  いつかのメリークリスマスへReprise

ゆつくりと十二月の明かりが灯り始め、慌ただしく踊る街を誰もが好きになる。

そんな街中をながめながら、仕事を早めに切り上げた僕は、渋滞に捕まったタクシーの中にいた。

「お客さん、すみませんね。この時間いつも渋滞なんですよ。」

すまなそうな運転手。

腕時計を見ながら僕は大丈夫だから、と微笑みながら伝えた。運転手は少し顔を和らげて言葉を返す。

「お客さん、いいことあったでしょ？」

まあ、クリスマスだからね、と返す僕に運転手はため息をついた。

「そうですか……。いいですね。幸せそうです。」

運転手はそのあともいろいろ愚痴をこぼしていた。

本当は売れない絵かきだ、とか。

家賃の不当値上げのために裁判費用が必要だ、とか。

そんな運転手の愚痴を僕は微笑みながら、聞いていた。

渋滞がひどくなったので降りることにした。

釣りはいない、と告げるとニコニコする運転手。

それを尻目に僕は肌寒い舗道で一息つくと、店へ向かい走り始めた。

記憶を辿り店の前についた時は全身クタクタだった。

なんだか、懐かしい感じで思わず笑った。

店の前で息をついていると、ちょうど店主らしき人がシャッターを閉めるために外に出てきた。

無理を承知で椅子を売ってくれとお願いする。

店主は椅子を持って帰れるようにしてくれた。

「そういえば、僕の親父がまだ店番やってた頃、お客さんと同じような感じのお客さんの話を聞いたことがあったなあ。なんだか不思議だよ。」

ニコニコ相槌をうつっている僕。

椅子の代金を支払い、メリークリスマスと挨拶を交わした僕は駅へ向かう。

ちょっと思い荷物を抱えながら電車の中、ひとりで幸せだった。

駅につくと彼女に今帰るね、と電話で連絡。

鼻歌でクリスマスソングを歌いながら、線路沿いに続く道を家へと少し急いだ。

家につき、家のドアを開け荷物を降ろし、ただいまと部屋に入る。

「おかえり。ご機嫌じゃん。」

キッチンのほうから彼女の声が聞こえた。

もう夕食の時間だった。

プレセントの準備をして、彼女にリビングにこれないか？と呼びかける。



「わかったー。いまいくねー。」

彼女はエプロンを外しながらリビングへ入ってきた。

「なーに？どうしたの？」

僕は誇らしげにプレゼントを見せた。

すぐに彼女は喜んでくれた。

「…ありがとう。」

彼女は笑顔のまま、そっと目を閉じた。

僕も目を閉じ、彼女を抱き寄せ唇を重ね合う。

静かな部屋に響くのは、ボリウムを下げたテレビの音だけ。  
静かに目を開けて二人は微笑んだ。

彼女の手料理。

ケーキとワイン。

二人きりのクリスマスを楽しむ。

僕はワインを手にして彼女に飲む？って聞いた。

彼女は笑顔で頷く。

僕はワインの詮をあけてそれぞれのグラスに注いだ。

乾杯の前に彼女が、僕の手を止める。

「どうせだから、雰囲気だそうよ。」

部屋の照明を落とし、彼女が準備した蝋燭に火を灯した。

綺麗なオレンジの光が二人を包んだ。

ふたり見とれてしまうほどの優しい、懐かしい光。

「きれい……」

彼女が呟き、僕に微笑みかける。

そうだね、と僕も微笑み返す。

「じゃあ、メリークリスマス。」

ワイングラスを重ねる。

小さく聞こえたグラスの音が、素敵に聞こえた。

部屋を染める蠟燭の火を見ながら、僕は彼女に囁く。

離れることはないよ、ずっと。

彼女はじつと僕を見つめ、笑顔で頷いてくれた。

そして、今度は長い時間唇を重ねあった。

ふたりにとって最高の日々がこれからも続きますように、

そう、願いながら。

喜びも悲しみも全部、分かち合う日がくること。

思って微笑みあっている、色褪せたいつかのメリークリスマス

君がいなくなることを始めて怖いと思った。

人を愛するということに気がついた、いつかのメリークリスマス

人を好きでいることに、理由なんかいらない。

二人ならきつとうまくやれる。

恋人じゃなくても。

ずっと好きだから、きつとうまくやれる。

僕たちは巡り逢えて、よかった。

ずっとずっと、願っているから。

幸せになれますように。

あなたは最高の、

友達でした。

ありがとう。

～Fin～

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5565d/>

---

FRIENDS～フタリノカタチ～

2010年10月10日19時23分発行